

信仰の遺産

浦上四番崩れ

150年の「旅」

上智大学キリスト教文化研究所

① 10:20~10:30

挨拶

上智大学教授 竹内 修一

② 10:30~11:30

信仰伝承の証しとしての「旅」を考える

— なぜ信仰が伝わったのか —

イエズス会日本管区長 レンゾ・デ・ルカ

③ 13:00~14:00

浦上四番崩れを通して見る カトリックの伝統の豊かさ

— プロテスタントの視点から —

青山学院大学教授 藤原 淳賀

④ 14:15~15:15

旅する教会の神秘

— 受けて、証しされた信仰 —

長崎純心大学教授 古巣 馨

⑤ 15:45~16:45

シンポジウム

(司会)上智大学教授 竹内 修一

6月23日(土)

場所 上智大学 中央図書館9階 921会議室

聴講料 一般:1,000円 学生:800円

発売日 5月25日(金)~

発売所

聖イグナチオ教会案内所(月曜休み) Tel.03-3230-3509

または上智大学キリスト教文化研究所(土日祝休み)

(JR中央・総武線、地下鉄丸の内線、南北線、四ツ谷駅下車)

問合せ先

上智大学キリスト教文化研究所

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1
Tel.03-3238-3540 Fax.03-3238-4145

信仰の遺産——「浦上四番崩れ」150年の「旅」——

潜伏キリシタンが、4回にわたって検挙された——いわゆる、浦上崩れである。しかし、一番から三番における崩れと四番におけるそれとの間には、本質的な違いがある。すなわち、前者は、密告によって起こったものの、農民らは、自らがキリシタンであることを表明しないまま事件は落ち着いたが、後者は、それを表明したがゆえに起こったのである。「浦上四番崩れ」(1868年～1873年)は、浦上村のすべての三千余名が、名古屋以西の20藩に分けて流配され、棄教を迫られた。この「浦上四番崩れ」がまた、「旅」とも呼ばれる。

第一の講演は、「信仰伝承の証しとしての『旅』を考える——なぜ信仰が伝わったのか——」と題して考察される。250年間もの間、迫害を受けながらも信仰は受け継がれた——これは、日本の教会の特徴である。潜伏キリシタンは、しかし、時代に応じて信仰表現を変えながらも、その本質は忠実に守ってきた。それを可能にしたのは、いったい何なのか。「旅」は、確かに、それ以前から受け継がれてきた信仰の延長線上にある。

第二の講演は、「浦上四番崩れを通して見るカトリックの伝統の豊かさ——プロテスタントの視点から——」と題して考察される。日本のキリスト教との出会いは、三度ある。まず、16世紀、イエズス会を中心とした宣教。次いで、19世紀の開国と共に再来したキリスト教との出会い。そして、20世紀の敗戦後のキリスト教宣教である。同講演では、特に、以下の諸点が取り上げられる。キリシタンの「苦難」の理解、ザビエルやヴァリニャーノといった優れたリーダーにおけるマイノリティーの視点、共同体の力強さと霊性、儀式の豊かさ、そして聖母の伝統である。

第三の講演は、「旅する教会の神秘——受けて、証しされた信仰——」と題して考察される。カトリック教会は、自らを「旅する教会」と呼ぶ(『教会憲章』第7章)。しかし、それ以前にも、教会は、「受難と証し」の信仰の歴史を「旅の話」と呼んでいる(浦川和三郎『切支丹の復活 後編』)。それはまた、司祭不在の250年間にも及ぶ苦しみの中で、希望を待ち望んでいた「旅する教会の話」でもある。信仰は、どのように生まれ、受け継がれ、そして証しされてきたのであろうか。